

亡き父の悲願を胸に——スラウェシ訪問記

～北スラウェシ日本人会に感謝～



訪問の背景

スラウェシ島（旧名セレベス島）は、私の父が生涯敬愛してやまなかった兄、つまり私にとっての伯父が戦死した場所です。父は幼いころから私たち姉妹に「お兄さんは優秀な人だった」「南の島セレベスで戦死した」と語り、「一度は訪れたい」と願っていました。しかしその夢は叶わず、父は四年前に他界しました。私はその悲願を受け継ぎ、昨夏、父の遺影とともにスラウェシを訪ねる決心をしました。

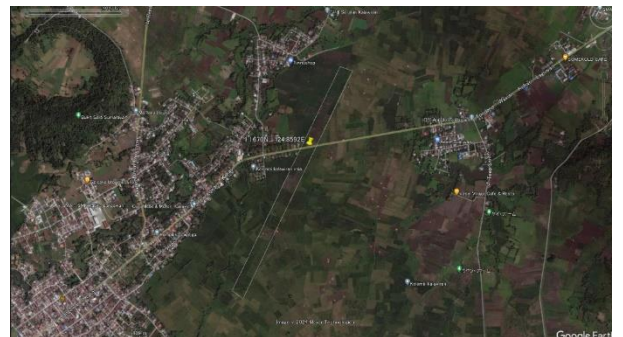
父の思い出と悔い

幼年学校から陸軍士官学校で学び、軍国青年として戦中を過ごした父は、終戦の日が近づくと、墨をすって静かに写経をしていた姿を私たち家族は鮮明に覚えています。父は「戦争はだめだよ。人を狂わすからね」と繰り返し語っていました。リゾート好き海好きの私がハワイ、沖縄、アジア諸国と遊びまわっても何も言わず、「一緒に」と誘っても「僕はいいな。遊びに行くところじゃないからな。」とやんわり断られました。以前、この地に誘ったときも「前に上司から海賊がいるから危険すぎると許可が出なかった、行きたいけれどダメだ。」と断られました。あの時既に空路があったでしょうに思考停止の娘でした（場所によっては海賊は今もいるそうです）。家族に対してはいつも穏やかで、母や娘たちに「ありがとう」と笑顔で接してくれる優しい人でした。

しかし私は父の複雑な心の内を十分に聞くことができませんでした。戦争体験を抱えながらも、多くを語らず逝ってしまった父。親孝行できなかった悔いは今も胸に残っています。だからこそ「せめて娘の私がその地へ行こう」と思ったのが訪問の動機でした。

調査と日本人会の支援

手がかりは、父が山形に建てた伯父の墓石に刻まれた文言のみでした。「故陸軍中佐榎安之（陸士 49 期卒）は昭和 19 年南方軍第 4 航空軍との作戦会議のためアンボンよりメナドに進出。昭和 19 年 9 月 8 日午前 10 時過ぎ、作戦会議中に大型機 30 機以上の攻撃を受けてランゴアン飛行場付近で戦死」。しかし、ネット検索では「ランゴアン飛行場」という名称は見つかりません。半ば



以下が 1944 年の爆撃隊の空港直上からの写真を推測位置にイメージオーバーレイしてみた図です。



あきらめながらも北スラウェシ日本人会に相談したところ、思いがけず詳細な情報が寄せられました。

I T担当の中村様は、緯度経度を示して飛行場跡地を教えてください、空撮写真をオーバーレイして「ここが滑走路跡と思われる」と特定してくださいました。長崎様からは「カカスからランゴワンに向かう直線道路沿いに広がる田んぼが跡地に当たる」との情報をいただき、駐車スペース横に仮祭壇を設ければよいと助言をいただきました。こうして、「セレベス」と、それまで島の名前レベルでしかわかっていなかった伯父の最後の地がおおよそ明らかになり、私は胸の奥に熱いものを感じ胸がつまりました。



もともとは私は、一人でスラウェシに来て、なんとかタクシーを使って「亡き叔父の戦死したその場を、わかるところまで探して帰ろう」と思っていました。「一人じゃあぶねえぞ」と我が家の男性陣が着いてきてくれており、一人ではなかったものの、スラウェシでのホテルは（国際ホテルでしたが）思った以上に英語がなかなか通じず、中村様ご夫妻がホテルまで来てくださったことは、不安だらけだった私たちの旅に安心を与えてくださいました。さらに北スラウェシ日本人会会長の今泉様からは「現地までご案内できます」との申し出をいただき、支援の輪の広がり感謝の念を感じませんでした。



奇跡の出会いと献杯

後日、今泉会長ご夫妻が車で迎えに来てくださり、片道二時間に及ぶ山道を案内してくださいました。言葉も通じず方向もわからない中で、現地にお詳しい会長ご夫妻のご支援は本当に心強かったです。

もし一人でタクシーに乗っていたら、山道や道中の雨や言葉の壁に不安で押しつぶされていたに違いなく、現地を知る方の存在は、まさに光のように頼もしかったです。

そして、奇跡のような出来事が起きました。おおよそ爆撃の場は近辺 1KM 以内と思われる場所まできたところで、今泉夫人が現地の言葉で道端の農家の方に声をかけると、「ここらへんに昔日本兵が住んでいて爆弾が落とされた跡が残っている」と祖父から聞いていたというのです。案内されるままに進むと、そこには確かに爆撃の痕跡が残っていました。父の遺影を手に、花を供え、線香をあげ、ふるさと山形のお米を巻き、同じくふるさと山形のお酒で献杯を捧げることができました。伯父の魂と父の思いが交差する瞬間、胸が熱くなり、ようやく父の願いを果たせた気がしました。

平和への思い

戦後八十年を迎え、直接戦争体験を語る人は急速に減っています。一方で、世界のどこかでは依然として戦火に苦しむ人々



がいます。若干三十歳で戦死した伯父のことを思うと、平和の尊さを改めてかみしめると同時に、これからの世代に戦争の愚かさを伝えていくことは、昭和を生きた者の責任だと強く感じます。

私は現在、教育の現場に身を置いています。生徒や若い保護者に今回の訪問について語る機会がありましたが、どこまで伝わったかは分かりません。それでも「他者を思いやり、尊重し、戦争のない世界、より良い世界を共に創り上げていける人になってほしい」という願いを込めて話をしました。



北スラウェシ日本人会の皆様の温かなご支援に深く感謝しつつ、これからも小さな努力を積み重ねたいと思っています。父の悲願を果たしたこの旅は、私自身にとっても平和を問いつける原点となったように思います。

